

「隈部館跡」庭園遺構について

尼崎 博正

(京都造形芸術大学教授)

昭和49年から同51年にかけて行われた環境整備にともなう発掘調査で検出された庭園遺構については、『隈部館跡』（菊鹿町教育委員会、平成5年7月）および同書所収「戦国期の有力国衆の館跡」（桑原憲彰:『ふるさとの自然と歴史』66号、昭和52年3月）の報告がある。同報告書と発掘当時の写真等を参考に、現況から考察される所見は以下の通りである。

1. 立地および空間構成

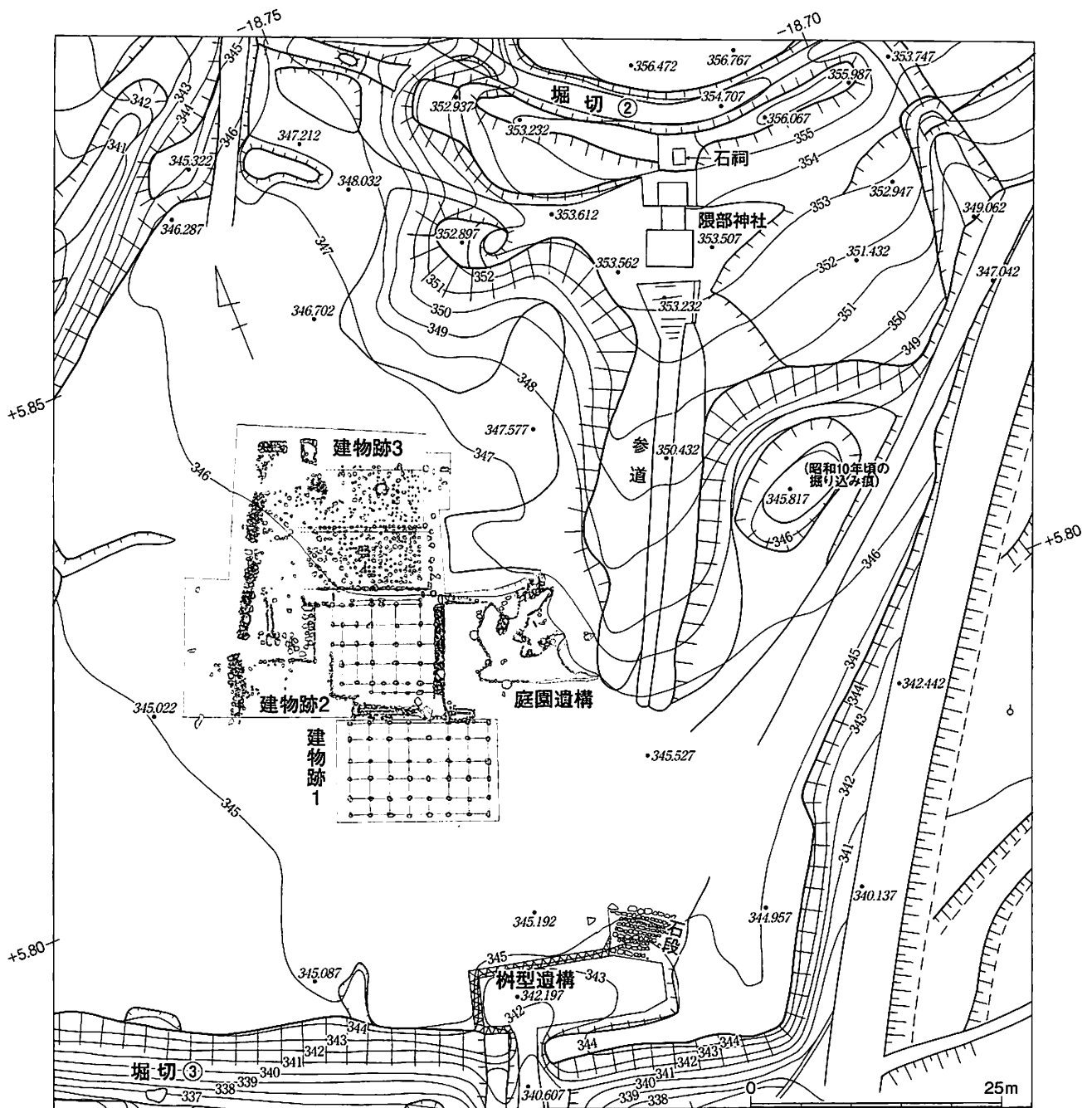
庭園は建物2の東南側（建築群の軸線が地形にならって西南方向へ振っている）に面し、背後は隈部神社（昭和11年3月建立）の鎮座する小高い丘の裾となっている。丘裾部にはその緩斜面を利用して滝石組を設え、あるいは要所に立石を配するなど立体的な構成であるのに対して、建物に近い平坦部は簡素な意匠の浅い池としているのが特徴である。また池の汀線を丘裾部では複雑に入り組ませている一方、建物側は緩やかな曲線の比較的単純な護岸ラインであり、なかでも南側の汀線が直線的に処理されている点が気になるところである。

館の空間サイズは少し小ぶりだが、時代性を鑑みて、当時の將軍邸や管領邸にみられる一町規模を意識している可能性があることから、試みに建築群遺構の全体を戦国期居館の空間構造（『戦国城下町の考古学』小野正敏 1997年）から解釈してみると次のように想定される。すなわち、建物1と建物2の区域が「ハレ」の空間で、前者が儀式の場としての「表（あるいは端）」の主殿で広場に面しており、後者が宴会・芸能の機能を有する「奥」の会所で庭園が付属するという構成になる。なお、集石遺構の建物3の区域は、「ハレ」の空間に対して、台所や蔵などのある「ケ」の空間として位置づけられる。

上記の仮説が成り立つとすれば、建物1およびその前面の広場を含む「表」の空間と、建物2および庭園で構成される「奥」の空間との間には、何らかの結界が設けられていたものと推察される。ことに、櫛型遺構から石段を登って来たとき最初に目にする「表」の空間性を考慮すると、「奥」の空間を遮蔽する堀のような構造物がどうしても必要となる。それに相当する遺構は検出されていないようだが、池南側の汀線が直線でおさまられているのは、何らかの構造物に規定された結果であるとみるのが妥当であろう。



隈部館跡 庭園遺構と隈部神社



隈部館跡 主郭平面図

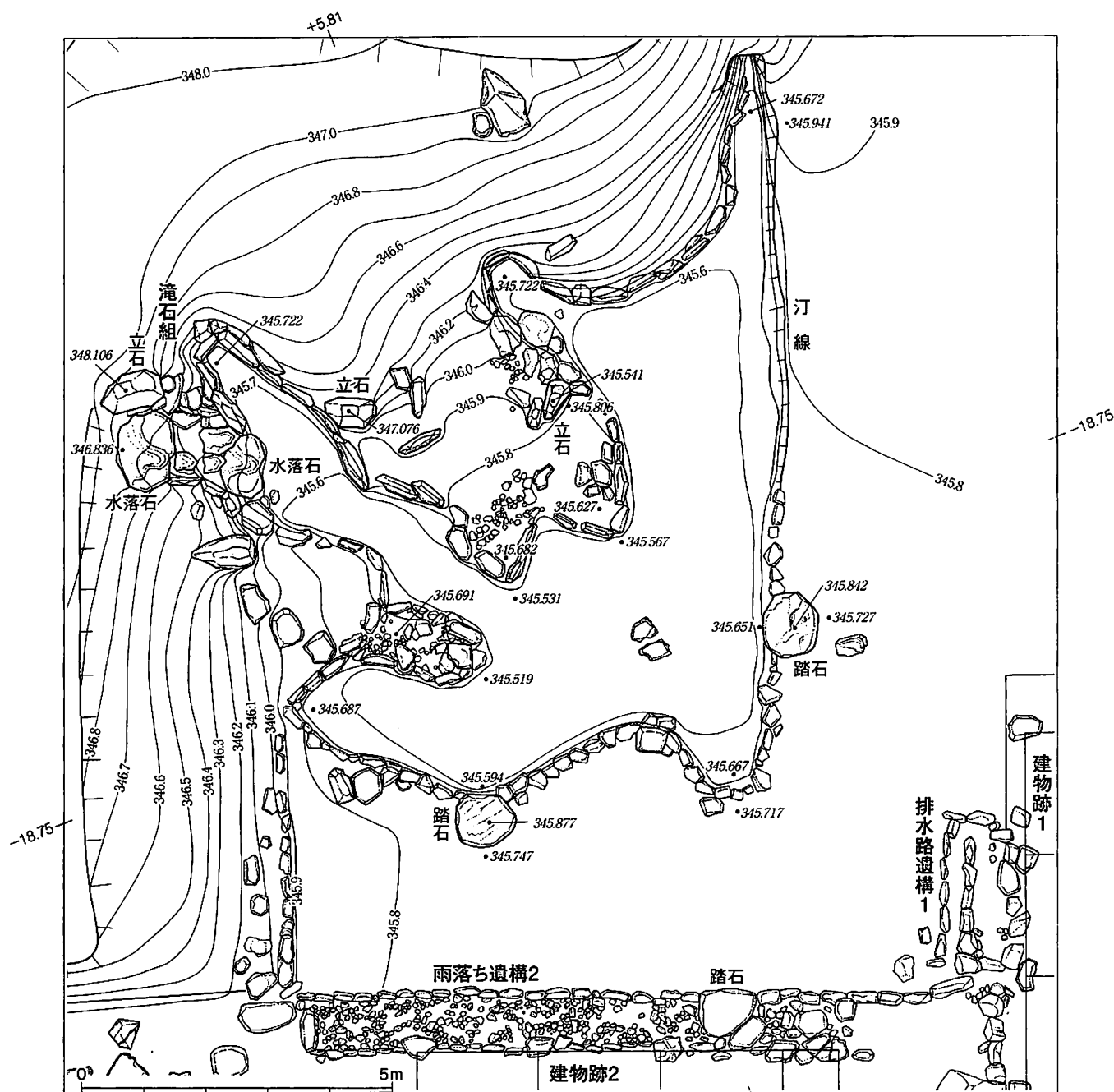
2. 地割・形態および意匠的特徴

庭園の立地と空間構成については前述したが、立石の面（つら）の向き等からみて、主な視点場は建物2であることがわかる。遠くの山並みを背景に、滝石組最上部に据えられた先頭形の立石を起点として、背後の丘が南へと下がっていく地形に呼応するかのように、順次高さを低くしながら要所に石を立てる構成は極めて秀逸である。

建築からだけではなく、庭に降り立つての鑑賞も意図されていたらしいことは、汀線の二か所に平石を据えていることから読み取ることができる。その配置は、一つが建物2内部からと同一の視線、もう一つは滝口を正面から観賞する地点として設定されたものと考えられる。また、建物2に付随する雨落ち遺構2の二か所に、踏み石となる程度の大きさの平石を据えているのは、庭への動線を考慮しての意匠とみてよい。

滝石組を中心とする立体的な石組が丘裾部に施され、その周辺の池の汀線が複雑である一方、平坦部の汀線は比較的単純で、かつ横長の石を一行に並べた簡素な護岸石組であること、また池の深さが20cm程度の浅いものであることについては前述したが、この池に水が張られていたのか、あるいは枯山水なのかは焦点となる。発掘時の写真から池底には円礫が敷き詰められていたことがわかる。その円礫が漏水防止のために施された地業の構造材が露出したものなのか、その保護材なのか、化粧材なのかを明らかにするには断ち割り調査が必要となろう。

桑原氏の報告（「戦国期の有力国衆の館跡」前出）によれば、「調査が進むにつれ池底部に土砂の沈澱が見られ、また最後に水を導入する水路が発見されるに及び、水を湛えた心字形の泉水であることがわかった」とされる。発掘調査によって検出されたという導水路の確認はできていないが、滝石組の立石脇に現存する水落石とみられる平石、池への落ち口に据えられている石、およびそれらの中間の平石に、明確に水の流れを想定しうる形状のものが用いられていることは注目に値する。池底や護岸に漏水防止の施工がなされているかどうかの確認調査と、排水口の可能性が高い池尻の精査が待たれる。





隈部館跡 庭園遺構と雨落ち遺構2

3. 築造時期と類例

隈部館の築造時期について桑原氏は、文献上明らかではないが、遺構から推定すると16世紀に入ってから構築され、その後、数代を経て現在に残る規模の館として完成されたものと思われるとしている。また本遺構の特色として生活遺物が少ない上、木炭・灰焼土等の火災を裏付ける状況も見られず、滅亡後に家屋が自然に朽ち果てたという状態でもなかったことを挙げ、これらの事実から館が営まれたのは短期間であり、何らかの理由で建物一切を他所に移転させたことも考えられるとしている。具体的には、天正六年（1578）に隈府城主の地位を獲得した後、そこへ移る際、建物も解体して移した可能性が強いという見解である。

全国的に見れば、16世紀を中心とする戦国期の居館に築造された庭園遺構として以下のような事例がある（『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所、1998年）。

- 1) 江馬氏館跡庭園（池庭、～16世紀初頃、岐阜県吉城郡神岡町）
- 2) 東氏館跡（池庭、～1541年、岐阜県郡上郡大和町）
- 3) 大内氏館跡庭園遺構（池庭、～1557年、山口県山口市）
- 4) 一乗谷朝倉氏遺跡庭園群（池庭、～1573年、福井県福井市）
- 5) 高梨氏館跡庭園（池庭、～1598年、長野県中野市）
- 6) 吉川元春館跡庭園遺構（池庭、1583～1591年、広島県山県郡豊平町）
- 7) 北畠氏館跡庭園（池庭、16世紀、三重県一志郡美杉村）

地域的には中部・北陸・中国地方に遺構が多く、九州での事例として隈部館跡庭園遺構が重要な存在であることがわかる。また様式的には本遺構と同様、すべて池庭であることが特徴として挙げられる。それらのうち、とくに高梨氏館跡と吉川元春館跡の庭園遺構に注目したい。

〔類例〕 高梨氏館跡庭園（池庭、～1598年、長野県中野市）

高梨氏館跡の庭園遺構は、庭園背後の土塁際に石組導水路をともなう滝石組を施すとともに要所に景石を配置する構成で、池は浅く、護岸に玉石一石を並べただけの簡素な意匠である。さらに滝石組付近の汀線が比較的变化に富んでいるほかは緩やかな曲線となっている点など、隈部館跡庭園遺構と共通する空間構成・地割・意匠であることは興味深い。導水路の存在から池には水が張られていたと考えられるが、池底が透水性の高い礫混じりの自然堆積層であるにもかかわらず、粘土を打つなどの漏水防止策がとられていない理由については不明である。



園池中景（北西から）



滝石組（北西から）



中島跡の景石（中央手前）と
直線状の護岸（左手中央）（西から）



直線状護岸石列（南西から）

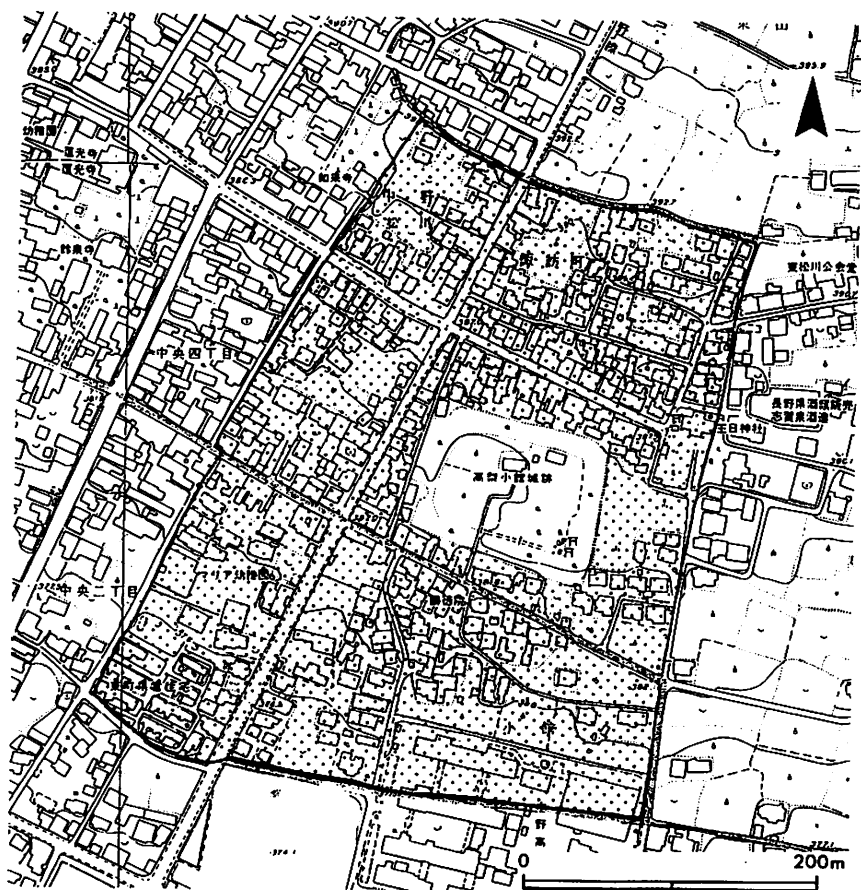


入江状護岸と閉塞護岸

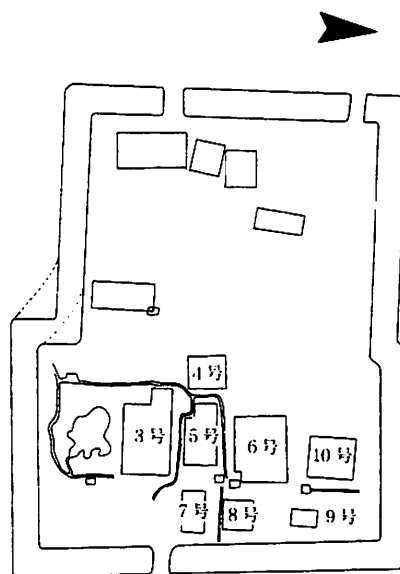


園池西北岸円弧状汀線（右手前）（北西から）

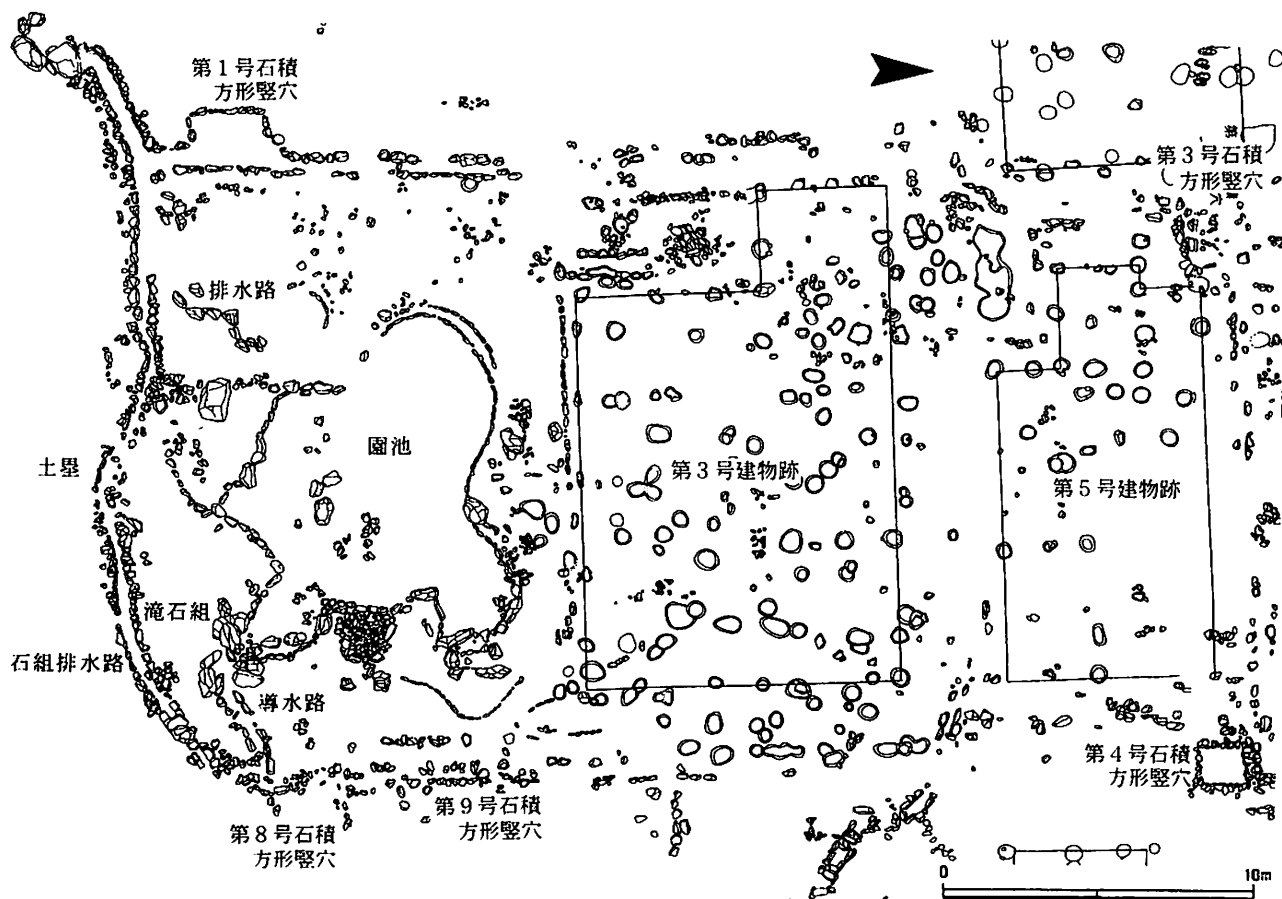
（『発掘庭園資料』 奈良国立文化財研究所 1998）



高梨氏館と館廻り



建物跡配置図



庭園遺構と建物跡平面図

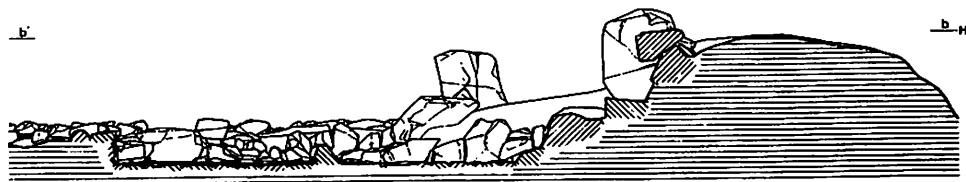
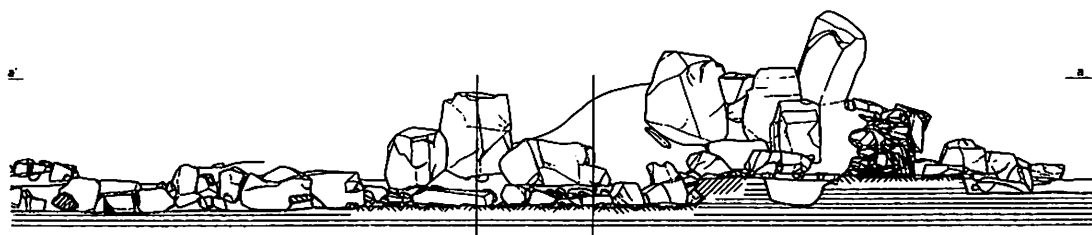
(「発掘庭園資料」奈良国立文化財研究所 1998)

〔類例〕 吉川元春館跡庭園遺構（池庭、1583～1591年、広島県山県郡豊平町）

吉川元春館跡庭園遺構は、会所に面する庭園で、三段に落ちる豪快な滝石組と築山裾部の石組を中心景とし、水深20cm程度の浅い池の護岸は一石を立て並べた意匠としているなど、立地や素材の地域的固有性を異にしながらも、隈部館跡・高梨氏館跡の庭園遺構との共通点が多い。特徴的なのは池底を石敷きとしている点で、地盤が粘土質であるため、漏水防止の処置をしなくても水が溜まる状態にあることから、水の修景を意図した意匠とみられる。導水路は検出されていないが、滝石組の最下段の水落石に隈部館跡でみられたのと同様の、水の流れを導く形状のものが用いられており、また池尻にオーバーフローの石が据えられていることから、水を張ることを前提とした池であると判断される。なお、直線の護岸は庭園の視点場である会所の建物にともなうものである。

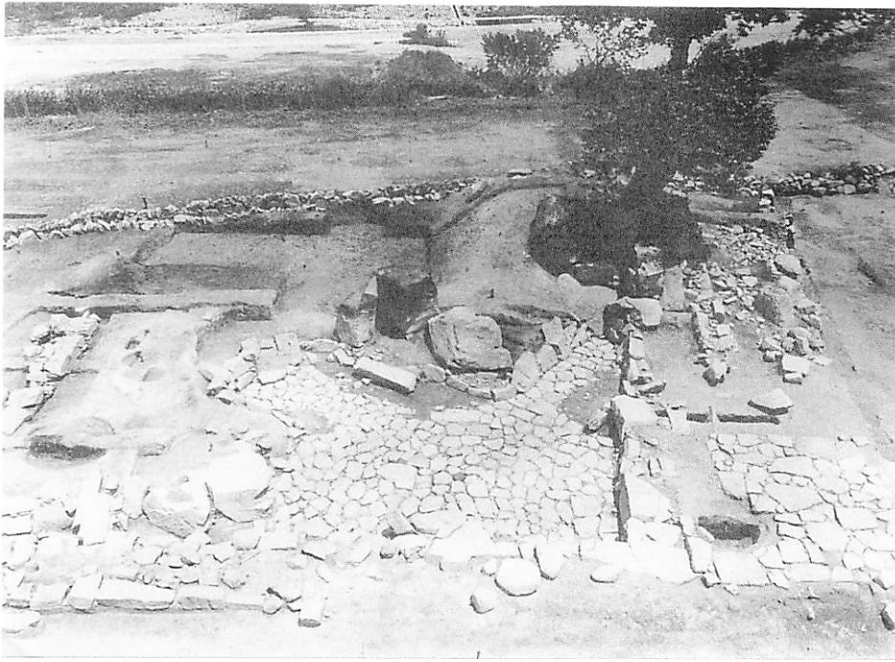


吉川元春館跡庭園平面図



吉川元春館跡庭園立面図

〔発掘庭園資料〕 奈良国立文化財研究所 1998）



庭園全景（南から）



庭園全景（南から）

（『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所 1998）

4. 結 語

以上のように、隈部館跡庭園遺構は戦国期居館の基準である方一町を強く意識して計画され、機能分化された空間構造の「ハレ」の場の「奥」の会所の庭園として築造されたものと推測される。庭園は格式をそのまま示すステータスシンボルであり、当時の空間概念と規範性にしがっていたとされるが、同時期の庭園遺構と比較検討することによって、空間構成・地割・意匠などの点においても共通性を有することが明らかになった。

このように、本庭園遺構は九州地域における戦国期の庭園文化を顕現するものとして、高い文化財的価値を有するといえよう。